

「自調自考」の精神を根底に据え、主体的な学習者を育成

渋谷教育学園渋谷中学校高校は、開校以来、「自調自考」を教育目標の中心に据え、あらゆる教育活動の指針としてきた。校外研修をベースとした探究学習、生徒の視野を広げる校長講話、学びの集大成である「自調自考論文」などを通して、どのような環境変化にも対応できる骨太の学力を育成している。

教育の柱は「自調自考」「国際人」「倫理観」の育成

渋谷教育学園渋谷中学校高校は、開校以来、「自調自考」を教育目標に掲げ、あらゆる教育活動の羅針盤として大切にしている。同校が目指す「自調自考」の精神を備えた人物とは、自ら調べ、考えて正誤を判断し、責任ある行動を取ることが出来る人だ。そうした人材を育むために、学校生活のあらゆるところに「自調自考」の精神を浸透させている。中学・高校ともノーチャイムで、校則は一切ない。校外研修は、現地集合・現地

解散が原則だ。生徒は先輩や教師の姿を見ながら、人間として、社会人として何が大切なのかを学んでいく。

このように「自調自考」にこだわりの抜くのは、その姿勢こそが「真の学力」を育むために欠かせないと考えているからだ。自調自考論文担当の石井信博先生は次のように説明する。

「いくらテストや補習で外から知識を与えても、受け身の学習に終わるだけです。考える力や主体性が身に付けば、自分に何が必要なのかを自ら考えて学習に取り組むようになり、結果として、大学入試に必要な学力も身に付くと考えています」

日常のあらゆる活動が、思考力や判断力、主体性など、生涯にわたって学び続けるために必要な力や姿勢の育成につながるというのが「自調自考」の基本的な考えだ。この「自調自考」と併せて、「国際人の養成」「高い倫理観の育成」が同校の教育の3本柱となっている。

生徒主体の校外研修でプランニング力・探究力を磨く

「自調自考」の精神を最もよく反映している取り組みが、中学1年生、高校2年生で実施する校外研修だ。プランニング力の育成のみならず、

教科学習と連携させることで、探究的な力の育成も視野に入れている。

校外研修は、中学校では各学年とも春秋の年2回、高校は1・2年生の秋に各1回行われる。5年間で計8回実施し、段階的に力を伸ばしていく。訪問先は全て、教科学習と関連付けている。例えば、中学1年生の春の校外研修では鎌倉を訪れる。同時期に社会科で鎌倉時代の歴史を学んでおり、生徒は武士の都を実際に歩き、イメージを膨らませる。中学2年生では、古くから醤油産業が盛んな千葉県野田市のメーカーを訪問し、江戸時代の産業や物流について



高際伊都子 たかぎわ いつみ
 洪谷教育学園洪谷中学校副校長
 教職歴27年。開校時より現職。「自
 調自考の精神で一歩ずつ前へ進も
 う」



河口竜行 かわくち たつゆき
 洪谷教育学園洪谷中学校
 教職歴28年。同校に赴任して18年目。
 進路部副部長。第14期生学年主任。
 「迷ったらアクティブな方を選ぶ」



石井信博 いしい のぶひろ
 洪谷教育学園洪谷中学校
 教職歴16年。同校に赴任して10年目。
 自調自考論文担当。「学びたい気持ち
 さそ育てれば、生徒は自ら勉強する」

洪谷教育学園洪谷中学校

- 1924 (大正13) 年開校の中央女学校が母体。96年に洪谷女子高校から共学の中高一貫校に移行。第2外国語講座の設置や海外研修など国際教育に力を入れている。帰国生が全生徒の2割を占め、海外の大学に進学する生徒も多い。スーパーグローバルハイスクール(SGH) 指定校。
- 設立 1996 (平成8) 年
- 形態 全日制/普通科/共学
- 生徒数 1学年約200人
- 2015年度入試合格実績 (現浪計)
 国公立大は、北海道大、筑波大、東京大、東京工業大、一橋大、京都大などに106人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、明治大、早稲田大などに延べ508人が合格。
- URL <https://www.shibuya-shibuya-jh.ed.jp/>

の理解を深める。生徒は調べ学習のテーマから、どの施設で何を調べ、誰に何を聞くのか、スケジュール、利用する交通機関を含む、研修全ての計画を自分たちだけで立てる。高際伊都子副校長は、その狙いについて、「生徒は知識の習得だけに意識を向けがちですが、研修を通して、実際に見たり、話を聞いたりしなければ得られない知識があることを知るはず。教室という空間だけでは得られない、学びの広がりを感じることを期待しています」と説明する。

高校の校外研修では、国際人としての意識を高めつつ、より深いレベルの探究学習を行う。1年生では平和学習の一環として広島を訪れ、高校2年生では中国を訪問し、アジア文化の源流に触れることで5年間の校外研修の総仕上げとする。

**平和教育を通して
多様な価値観に触れる**

高校での校外研修のうち、探究的な要素が強いのが、スーパーグローバルハイスクール(SGH)の中心

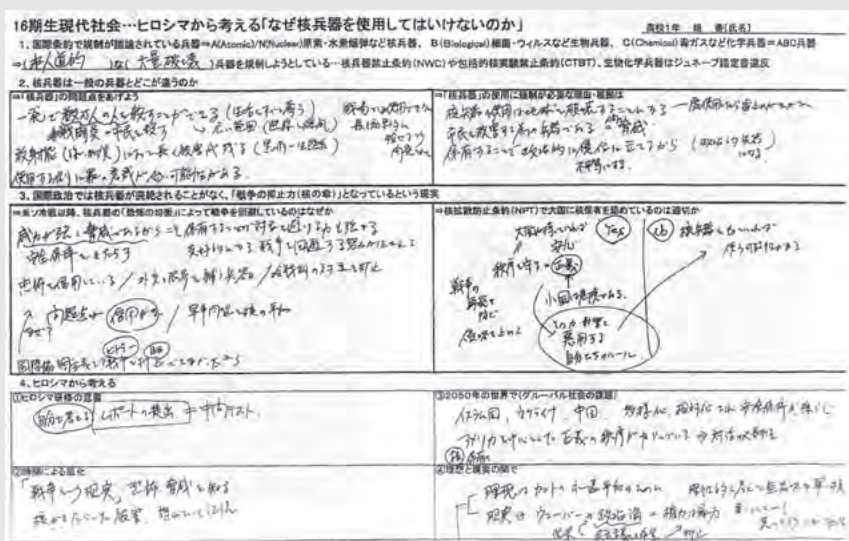
的な活動である広島研修「Project Hiroshima」だ。国語科・社会科・英語科などによる教科横断型の授業で、平和への理解を深め、「人間と安全保障」をテーマとした探究活動につなげているのが特徴だ。

2014年度の活動を例に具体的に見ていく。

国語の授業では、『黒い雨』など原爆に関する作品、核兵器をテーマとしたアメリカ映画を題材に、戦争に対する日米の意識の違いについて考察した。更に、社会科の授業では、カントやウエーバーなど著名な思想家の政治観・平和観や、東京裁判の記録などを通して、平和について考えた(図1)。様々な角度から戦争や核問題を捉えることに

よって、教科学習が根底ではつながっていることを実感させ、より多面的・複眼的な視野の獲得を狙いとした。英語科の授業では、数人から成るチームで広島と平和をテーマとした

図1 広島研修の際の生徒のレポート



*学校資料をそのまま掲載

プレゼンテーションビデオを作製し、海外の協定校に送付して、高校生に評価してもらった。原爆の被害や戦後の復興など、戦争にかかわるものから産業や観光まで、生徒が自らテーマを決めた。英語は流暢だったか、言いたいことが伝わる内容か、訴えかけるものがあつたか、もつと聞きたいと思わせる内容だったか、といった点を評価の対象としてもらった。

同校の生徒はおおむね核兵器に否定的な考えを持っていたが、アメリカの協定校には、戦争の早期終結のためにはやむを得なかったと考える生徒もいた。海外との交流を通じて、育った国が違えばものの見方や考え方も変わるといふ、当たり前ではあるが見落としがちな、物事の二面性に気付かされる生徒は多い。ある生徒は、「戦争は被害を受けた側は覚えているが、苦痛を与えた側は覚えていない。自分たちの正しさを主張するだけでなく、被害を受けた側の痛みについての想像力がないと、議論は出来ない」と述べた。

「そうした学びは、教師がいくら教科書を使って教えても、生徒に実感させることは容易ではありません。

体験からしか得られない学びがあるからこそ、私たちは多様な機会を生徒に提供すべきなのです。生徒は体験を通して、もつとうまく伝えたいという思いも強くします。教科学習の必要性を実感し、英語はもちろん、背景知識となる歴史や文化についてもつと知りたいという意欲も高めていくのです」(高際副校長)

生徒と社会をつなぐ 年6回の「校長講話」

同校では、学んだ知識を、自分の人生や社会にどのように生かしていくのかを考える機会も大切に行っている。田村哲夫校長が前身の渋谷女子高校時代から40年以上続けている「校長講話」は、生徒が人生や社会について考え、視野を広げるための取り組みだ(図2)。中学1年生、高校3年生まで年6回、計36回を正規の「授業」として組み込んでいる。

テーマは、中学1年生「人間関係」、中学2年生「自我のめざめ」、中学3年生「新たな出発(創造力)」、高校1年生「自己の社会化」、高校2年生「自由とは」、高校3年生「自分探しの旅立ち」だ。授業は45分。「学びと

図2 「校長講話」高校1年生の内容

年間テーマ「自己の社会化」

1 学期	2 学期	3 学期
<p>① 高校生活とは</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際羅針盤—日本の明日を考える 「高校時代に心がけて欲しいこと」朝倉紘治 『風姿花伝』世阿彌(ぜあみ) 司法制度改革 自己同一性の確立度 	<p>② 自己発見</p> <ul style="list-style-type: none"> 『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』石川准 『本という不思議』長田弘 『誇り高き市民 ルソーになったジャン=ジャック』小林善彦 	<p>③ 自然と地球環境</p> <ul style="list-style-type: none"> 「熱帯地域と国際交流」小坂光男 サステイナビリティ学とは 『DNA』—機能と構造 サイエンス 温暖化の地球史
<p>④ 読書と自己発見</p> <ul style="list-style-type: none"> 『海図と航海日誌』より 子供の読書と大人の読書 池澤夏樹 『夜の風見鶏』阿刀田(あとうた)高(たかし) 『みみずくの散歩』五木寛之 『ゾウの時間ネズミの時間』本川達雄 	<p>⑤ 感動と学習</p> <ul style="list-style-type: none"> 論理と情緒・教養立国ニッポン 藤原正彦 『「超」勉強法』より 勉強は意欲で進む 野口悠紀雄 現代に至る構造主義 ・ゲートに並ぶ賢者 オペロン説 動的平衡 	<p>⑥ 学問への旅立ち</p> <ul style="list-style-type: none"> 『アメリカン・マインドの終焉』より 書物 アラン・ブルーム 『夕陽妄語』加藤周一 学生の資質について 『啓発録』橋本左内(さない)

*学校資料を基に編集部で作成

は何か「国際理解」「友情」などのテーマを毎回設定し、古今東西の小説や伝記、哲学書、啓蒙書などを紹介しながら、生徒に人間の生き方や社会のあり方について考えさせていく。

「校長が答えを述べることはありませんし、全ての話が生徒に響くとは思っていません。様々な考え方を示すだけで、人生の方向性を決めるのは、生徒自身であるというのが講話のスタンスです。生徒が本気で人生と向き合い始める時期は、個人の資

質や発達段階によって異なります。多様な話題を提供し、1つでも心に響いて成長の糧になればよいと思っています」(高際副校長)

生徒が書いた校長講話の感想文は全て、担任、学年主任、副校長、校長が目を通す。それもあって、生徒は真剣に書くという。

感想文は担任にとって生徒把握のツールにもなっていると、進路部副部長の河口竜行先生は指摘する。

「生徒の感想を読んでいると、中学

3年生から高校1年生くらいで急に大人びていくのが分かります。一見受け身に思える生徒も、書いたものを読むと、実は自分の進路や生き方をしっかりと考えていることが少なくありません。生徒の自我の確立という意味で、校長講話の果たす役割は大きいと思います」

「独自科目で論理的思考力や表現力、課題解決能力を養う」

「自調自考」の実現のために、論理的思考力や表現力、課題発見・解決力の育成も重視している。そのため、独自科目を早くから整備し、指導方法を確立させたことも、今日の同校の躍進を支える原動力となっている。

論理的思考力・表現力の育成を図る学校設定科目は、中学校の「表現」(2単位)、高校の「文章表現」(1単位)である。

中学校での「表現」は、総合的な表現力の育成を図る。文章力はもちろん、ディスカッションやディベート、スピーチの能力、それらに付随して必要となる資料収集力やICT活用

力などを総合的に身に付けていく。

高校での「文章表現」は、文字通り文章に焦点を絞っている。元新聞記者の講師2人が各20人の少人数クラスを受け持ち、生徒は、時事問題や「家族」「友情」など様々なテーマについての文章を書く。

一方、課題発見・解決力を養うのが、「総合的な学習の時間」で実施している「自調自考論文」だ。生徒が自由に課題を設定し、解決を目指す探究学習であり、論文提出は卒業要件の1つになっている。

高校1年生1学期に論文作成上の基本的な知識・スキルを身に付けた上で、仮の研究テーマを決め、類似するテーマの生徒を15人程ずつ集め、2学期から約14のゼミに分かれて、研究テーマに関することを学ぶ。その後、担当教師の指導を受けながら最終的な論文テーマを決め、ゼミ内での中間発表を経て、高校2年生2学期までに1万2000字の論文を完成させる。論文テーマは、物理や社会学、心理学などの学究的なテーマからサブカルチャーまで幅広い。

環境変化に対応できる力の育成こそが大切

毎年、研究テーマの決定に時間が掛かる生徒もいるため、仮テーマを決める際、卒業生の有志がテーマ決定や研究の進め方についてアドバイスをする場を設けている。

中間発表では、プレゼンテーションソフトなどを使い、1人5分程度で発表する。発表の中でゼミ生同士が意見を述べ合う過程も、論文の内容を濃くするために欠かせない。

「論文の完成度もさることながら、何より重要なのは研究の過程です。難しい英語の参考文献を読まなくてはいけなかった、文系のテーマに理系的な要素が必要になったなど、研究を深めれば深めるほど予想外の場面と向き合うことが多くなります。難しいテーマに挑戦して、思うような結果が得られない生徒もいます。1つのテーマを真剣に追究した人しか分からない苦労や喜びを感じるのですが、自調自考論文の最大の目的なのです」(石井先生)

論文を自身で外部のコンクールに出す生徒も多く、図書館振興財団主催「図書館を使った調べる学習コンクール」では、同校の生徒が2年連続で文部科学大臣賞を受賞した。

15年度入試で、同校は前年度の2倍以上に当たる33人の東京大合格者を輩出し、国公立大合格者は100人の大台を超えた。現行課程の移行時に、同校ではカリキュラムの大きな改編や補習の増加などを行わなかったが、河口先生は、「大切なのは、どのような環境変化が起きても対応できる力を、生徒に身に付けさせることだと考えます。生徒一人ひとりが自調自考の精神を身に付け、主体的に進路実現に向かっていくことが、結果的に進学実績にも結び付くのではないでしょうか」と指摘する。

そうした同校においても、教師が指示を出してから生徒が動く場面は少なくない。今後は、アクティブ・ラーニングの質を高めるなど、あらゆる場面で「自調自考」を推し進め、生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成に努めていく考えだ。